



こころの 言の葉

～第16集 一つの言の葉、一つの^{おも}想い～

はじめに

鹿児島市教育委員会教育長 杉元 羊一

本年度の「こころの言の葉」作品集が出来上がりました。皆様にお届けできることを大変うれしく思います。これは、「鹿児島市の教育を考える市民会議」の提言を受け、平成十五年度から実施されているものです。これまで、「こころの言の葉」コンクール及び作品集には、各方面から大きな反響をいただいております、今回で十六回目を迎えました。

本事業には、面と向かっては恥ずかしくてなかなか言えないようなことを一枚のはがきに託し、中学生とその親の心の交流を図り、お互いの存在について考えを深め合うという趣旨があります。今年も数多くの「言の葉」が寄せられ、その数は一万六千十一一点。また、親の部の応募も七年連続千点を超え、「こころの言の葉」への関心の高さ、本事業の趣旨である、親と子の心の交流が図られていることをうかがうことができました。さらに、八月にはFM鹿児島市の生放送番組「朝CAFÉ」で二十九年度の入賞作品が朗読され、今年度もより多くの市民の皆様が親しまれる機会に恵まれたことを大変うれしく感じています。

この作品集には、中学生とその親が、お互いに向けて宛てた四十五編のメッセージが掲載されています。心からの感謝を素直に伝える言葉。不安で揺れる思いをぶつける言葉。遠慮がちに、自分のささやかな願いをつぶやく言葉。反抗期の自分をもて余しながら不満と感謝の気持ちをつづける言葉。我が子の反抗期に戸惑いながらも大きな心で受け止める言葉……。一つ一つの言の葉が、読む者の心を揺さぶります。御家族皆様でこの作品集に触れ、親や子としての在り方について考える契機としていただければ幸いです。

最後に、素晴らしい「こころの言の葉」を寄せてくださった全ての皆様から感謝の意を表し、はじめの言葉とします。

平成三十一年一月

目次

「^{おも}想いを伝える」言の葉

— 子から親へ —

私の宝物	4
たとえば、僕が親になったら	5
父と私の約束事	6
父が亡くなって	7
父の思い	8
わがまま	9
お母さんとのじゃんけん	10
お母さんの手	11
明日は	12
父の存在	13

「^{おも}想いをつなげる」言の葉

— 親から子へ —

母の毎日	15
中学生のあなたへ	16
一枚のメモ	17
大人になっていく君へ	18
お前への手紙	19
世界一のサンドイッチ	20
サプライズ	21
愛しのあなたへ	22
中学生になったあなたへ	23
うしろ姿	24

「^{おも}想いを交える」言の葉

— 子から親へ —

「ただいま。」の一言で	26
やっと会えた十三年目に	26
からっぽの弁当箱	27
頑張れの一言	27
我が家の掟 ^{おきて}	28
届かないありがとう	28
母からのプレゼント	29
「ありがとう。」の一言	29
夕食と団らん	30
強くなりたい	30
モーニングコール	31
素直になれなくて	31

「^{おも}想いを重ねる」言の葉

— 親から子へ —

もっと笑ってよ	33
家族と仕事	33
引越し	34
あなたが私に教えてくれたもの	34
「まあいいか。」	35
お母さんがうるさい理由	35
母の日課	36
成長	36
普通の暮らし、最高!	37
見過ごしている日々の景色	37
忘れられない四月一日	38
願い	38
お母さんだから	39

平成三十年年度「こころの言の葉」コンクール入賞者一覧	40
平成三十年年度「こころの言の葉」コンクール表彰式	41
審査員講評	42
編集後記	43

「^{おも}想いを伝える」言の葉

—子から親へ—



私の宝物

私は毎年、誕生日が楽しみです。大きくなるにつれて、プレゼントより、おいしいご飯より、楽しみになってきたことがあります。それは、私が生まれた時の話をしてもらったことです。同じことでも、照れくさくて、でもうれしくて……。

お母さんは、とびっきりの笑顔で、お父さんは、ささやくように話します。今年は、おなかにいたときのエコー写真も見せてくれました。

私の夢は、お母さんになることです。お母さんたちみたいな夫婦になって、赤ちゃんを産みたいです。とっても、感動するのでしょうか？

そして、私もいつか自分の子供に話してあげます。

お父さん、お母さん、いつもありがとうございます。大好きだよ。もう、十三歳になりました。また、来年もお話聞かせてね。私の宝物です。

たとえば、僕が親になったら

たとえば、僕が親になったら……。

自分の子を起こしてあげたい。「おはよう。」と言ってあげたい。たまには、お弁当を作ってあげたい。「今日は、パパ弁の日」というのも喜んでくれるかもしれない。お弁当だけじゃなくて、ご飯も作ってあげたい。簡単なものしか作れないだろうけれど、作ってあげたい。

一緒にお風呂に入っただのんびりしたい。今日何があったか、お話したい。一緒に遊んであげたい。「疲れてあきた。」って言われるまで、遊んであげたい。

寝るときは、一緒に寝たい。「おやすみ。」って伝えたい。

なぜなら、それは全部お母さんが僕にしてくれたことだから。

父と私の約束事

私の父は、仕事が遅くまであって、家に帰ってくるのはだいたい深夜。

たまに早く帰ってきてても、部屋にこもって仕事をしている。

そんな父と私には、約束事がある。

それは必ず、私が学校に行くときや、父が仕事に行くときに

「行ってきます。」

「行ってらっしゃい。」

と、言葉を交わすということだ。

父と私が言い合いになっても、絶対に約束事は破らない。

これは、私が小学生のころから続けていることだ。

だから、私は今日も父に

「行ってきます。」と言う。



父が亡くなって……

去年お父さんが亡くなり、お母さんは一人で僕を育ててきました。

なんであの優しいお父さんが、なんであの笑顔あふれるお父さんが、死ななくちゃいけないだと、そのときの僕は父の死が信じられず、暗くなっていきました。

でも、お母さんは、「今日、学校楽しかった。」とか「今日、部活どうだった。」と、いつものように笑って話しかけてくれました。

家族の中で一番悲しいはずのお母さん。

家族の中で一番お父さんを愛していたお母さん。

それなのに、お母さんは、家族が暗くならないように笑って接してくれました。お母さんは本当にすごいなあと思いました。

お母さん、いつも苦勞かけてごめんね。一番悲しいのはお母さんなのに、僕らを笑わせてくれたね。次は僕たちがお母さんを幸せにするからね。

父の思い

私の父は無口で恥ずかしがりやだ。普段から思っていることを口に出さない性格である。

だから私は、父とはあまりしゃべらない。

でも、私の後輩に、父親とすごく仲がよい子がいる。手をつないで歩くこともあるそう
だ。正直、私はそれをうらやましいと思う。私も父とすごく仲のよい関係になりたいなと
ずっと思っていた。

ある日、私は父の肩もみをした。すると、たった十分しただけでなんと五百円もくれた
のだ。悪いと思ってこっそりと父の財布に返そうとしたとき、中に私が小さい頃にあげた
手紙が入っていた。そこには、「パパ、大好き。」と書いてあり、この紙をずっと持ってい
てくれたのだと思うと、とてもうれしくなった。パパ、いつもありがとう。

これからも大好き。

わがまま

ぼくが悪いことをすると、母に怒られる。

そして、ぼくが怒られたことを、母が父に言う。

そして、父に怒られる。

本当は、どちらか一人にはなぐさめてもらいたい。

こんなぼくは、わがままかな。



お母さんとのじゃんけん

ご飯を食べた後、私とお母さんは毎日のようにじゃんけんをする。

じゃんけんで負けた方が、皿洗いをしなければならぬ。お母さんの作戦は分からないけれど、いきなり大きな声を出して、

「じゃんけんぽん！」

と言う。私は、いきなり過ぎて慌てて手を出す。でも、私は、仕掛けてくるお母さんに勝つことが多い。

悔しそうな顔で皿を洗っているお母さんを見ながら、私は隣の和室で洗濯物をたたむ。

このじゃんけんの時間は、私が一日の中でとても楽しみにしている時間だ。



お母さんの手

私は、よくお母さんにしかられる。それが私のためだと分かっているにもかかわらず、それでも反発してしまう。

そんなことがあった日は、口をきかなかった。

しかし、その日の夜、私がベッドに入り少しすると、お母さんが入ってきた。

私は寝たふりをしていた。すると、お母さんは私のほおをそっと、優しくなでた。その手

はとても温かかった。

私は、胸がしめつけられ、お母さんが出ていった後、私は泣いた。

「お母さんは、こんなに自分のことを思ってくれているのに……。」

お母さん、いつもごめん。そして、ありがとう。



明日は

ふらっと向かった父母の部屋。

本棚を眺めていると、下の段に子育てについての本が何冊か置かれていた。

父と母も悩みながら私を育ててきてくれたんだな……。

その中に、しおりのはさまった新しい本が一冊。

手に取ると、それは「反抗期」についての本だった。

以前は素直にうなずけていたことも、今はなぜか胸にひっかかってしまう私。

今日は、「イライラ」とは違う感情がわいてきた。

「ごめんなさい。そして、いつもありがとうございます。」

すぐに反抗をやめるのは難しいけれど……。

明日は、ケンカをしない日にしよう。



父の存在

私の父は、今年の四月から東京で単身赴任している。いつも父は飲み会や残業などであまり家にいる時間は長くないから、それほど日常に変化はないだろうと、父が東京へ行くまでは思っていた。

しかし、なんだか家の中が寂しくなった。弟は、

「お父さん、今日何時に帰ってくるの。」

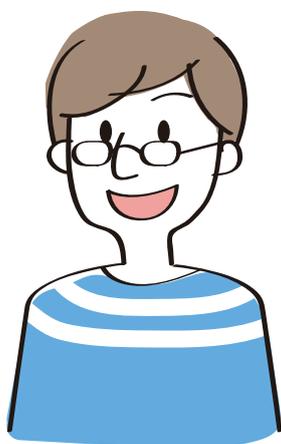
といつもクセで言うし、妹は、

「パパとおふろに入りたい。」

と言い出す。おまけに母は、すぐに不機嫌になる。

夏休みになって、父が帰ってきた。一気に家の中が明るくなった気がした。ご飯もいつもよりずっとおいしく感じた。

失って初めてその大切さに気付くとは、こういうことなのだろう。父は我が家の太陽であり、私たちは父を中心にまわっている惑星なのかもしれない。



「^{おも}想いをつなげる」言の葉

— 親から子へ —



母の毎日

朝五時半、飛び起きて炊飯器を開ける。八合のご飯を盛り、五個のお弁当を作る。これが母のスタートです。毎年作る量も多くなり、手作りにこだわったおかずには挫折しそうにもなりますが、帰ってきてお弁当箱を出す時の、あなたたちの一言が聞きたくて、がんばっています。

朝ごはんは、たっぷり食べてもらい、授業中おなかがすかないようにと送り出し、昼はお弁当を食べながら、みんなの食べている顔を思い描き、夕方は、夜ごはんの買い出しです。好きな物、食べたい物、たくさんの野菜、明日のお弁当のおかず、毎日毎日、母の頭は、メニューでいっぱいです。

「うんまっ。」の一言が今日も明日も聞けますように、母は今日も全力で、あなたたちの胃袋を愛で満たします。

中学生のあなたへ

あなたが小さい頃は、よく夜の散歩に出掛けたものよ。

夜泣きがひどくてなかなか寝なくて、こっちが泣きたいよって何度思ったことでしょう。夜空を見上げてあなたの顔を覗いたら、お目めをパチパチさせながら笑ってこっちを見てたのよ。おかしくて肩の力がすっと抜けて、その時、あなたにとことん付き合おうと思った気持ちは、今も変わらず継続中です。

勉強と部活で忙しい毎日にイライラすることもありますが、時には私に八つ当たりもしたくなるでしょう。

でもね、どんなことが起きても平気よ。

私はあなたに、とことん付き合おうって決めたから。

迷って悩んでいろいろなことを経験しなさい。

いつもあなたのことをそばで応援していきます。

母より



一枚のメモ

小学生のときは、一緒に買い物に行ったり、遊んだり、お風呂に入ったり。それが中学生になるや、部活動や宿題で忙しそう。そして、暇さえあれば友達とのラインに夢中。

こんなに放っておかれるなら、仕事や飲み会を減らしてもっと一緒にいればよかった。

この寂しさ、自業自得だ。

寝顔を見ると、いつの間にかお姉ちゃんになっていることが、嬉しかったり、寂しかったり。

ある日、遅くに帰宅すると、テーブルに一枚のメモが。

『いつもお仕事頑張ってくれてありがとう。私も、部活も勉強も頑張るからね。』

数回読み直し、何もしてあげられない無力感が込み上げてきた。

折たたんで、財布に入れた。

ただただ、「ごめんな。」とつぶやきながら。

大人になっていく君へ

ついつい言ってしまう

もう自分でちゃんとできるのに

ついつい言ってしまう

言わなくても良いことを

ついつい聞いてしまう

あなたのことを知りたいから

ついつい聞いてしまう

答えたくない君に



お前への手紙

十四年前、夢ももたず、ただ今を生きているだけの人間だった自分のもとに、お前がきてくれた。

初めてお前を抱いたとき、うれしさより、責任を感じた。もし自分が人から後ろ指を指されることをしてしまったら、お前が悲しい思いをする。それだけは避けたいと思い、今まで一日一日を生きてきた。

自分はお金持ちにも、他人に尊敬される人間にも、なんにもなれないだろう。ただ一つ、お前が成人したときに、「お前の父親になれた。」と思いたい。

この手紙に対して、お前からの「見返り」や「応じ」はいらない。受け取ってくれれば、それでいい。

世界一のサンドイッチ

寒い寒い日曜の朝、

「寒くいい！でも、今日休み！イエスイ！」

と、弟とふたりで私の布団にもぐり込んできましたね。

息子たちには生まれた私は、さながらサンドイッチのハム気分。

こんな幸せなサンドイッチがあるのでしょいか。

ハム母は涙が出そうになりましたよ。

そんなこと、知らないだろうけれど……。



サプライズ

三月末の単身赴任先に向かう日の朝。

食卓の上には冷凍された多くの料理。

あなたが、お父さんが家を出るときに渡してと、お母さんに頼んだそうですね。一人暮らしになるのを心配して、一週間分の夕食を作り置きしてくれたんだって。丁寧に食分ずつ小分けし、メニューと賞味期限が書かれたメモを添えて。自分も部活に塾に忙しい春休みだったのに、夜こっそり作ってくれていたんだってね。サプライズ好きのあなたらしい渡し方だと、ちよっぴりおかしかったけれど、あなたの優しさが嬉しくて、あなたの成長が頼もしくて、涙をこらえるのに必死でした。

転勤先での仕事は忙しかったです。でも、あなたの作ってくれた料理で、どんなに忙しい仕事も頑張れました。料理は全部食べてしまったけれど、あなたの書いたメモは、今でも冷蔵庫に貼ってあります。

素敵なサプライズで、いつも家族を喜ばせてくれてありがとう。

愛しのあなたへ

幼い頃から肌が弱かったあなた。ある日、アトピー性皮膚炎と診断された。ショックだった。その後も、卵アレルギー、喘息と、色々な病気に苦しむあなたを見て、夜中に幾度も涙し、自分を責め続けた。

ある時、あなたに謝った。「もっと丈夫に産んであげられなくてごめんね。」と。

すると、あなたは言ってくれた。「お母さんのせいじゃないよ。産んでくれてありがとう。」

その言葉を聞いて、涙があふれた。

心優しい子に育ってくれた。それだけでお母さんは幸せです。

産まれてきてくれて、本当にありがとう。



中学生になったあなたへ

小学生の頃、友達と遊ばず家にいることが多かったあなたが、中学生になったとたん、部活に、遊びに、とても忙しそう。

楽しそうなあなたを見てうれしい反面、寂しい、心配な気持ちがある。

帰ってきたら顔を見て、表情でいろいろ想像する。楽しかったんだろうな。なんか落ち込んでいるのかな。何かあったのかな。

いろいろ話してほしいのに、ろくに話もしないでラインばかりしているから怒ったら、「私が話したいタイミングの時は、お母さんが聞いてくれない。」

と言われて、ドキツとした。

確かに、思い当たる。私も寂しい思いをさせてしまっていたのだ。

手を止め、目をみて話そう。一緒に。

大人に近付いていくあなたとの大切な時間を大事にしたい。

うしろ姿

あなたのうしろ姿は、とても小さい。

「いってらっしゃい。」

毎朝、違うあなたの後ろ姿。

勉強を頑張る。

部活を頑張る。

友人と中学生生活を楽しむ。

時には、辛いこともあるだろうけれども、

何事も一生懸命頑張るあなたの後ろ姿は、

大きく、力強く感じます。



「^{おも}想いを交える」言の葉

—子から親へ—



「ただいま。」の一言で

私の母はすごい。

「ただいま。」

私が家に帰ってきて発するこの一言だけで、私の気持ちを読み取ってしまう。

「今日は何かいいことがあったでしょ。」

そう言われると私の弾んでいた心は二倍に弾んで、カバンを背負ったままその日の出来事をすぐさま話す。

「今日は元気がないね。何かあった？」

そう言われると、私の落ち込んでいた心は、ふっと軽くなる。そして私がその日の出来事を話している間、母はずっと黙って相づちを打ち、真剣に聞いてくれる。それだけで私の心はいつも救われる。

私の母はすごい。私の尊敬する大好きな人です。

やっと会えた十三年目に

「ほら見て。」

母が、やっと会えた感動を笑顔満開で話してくれた。私が誕生した瞬間、恐る恐る両腕に私を抱え、目尻を下げ嬉しさを爆発させた表情が伝わる父との写真だ。生まれたばかりの私に「笑って、笑って。」とも言ったそう。愛されて大切に育てられている温もりに包まれる喜び。私の中に喜怒哀楽が芽生え、四季も感じられる。素敵な名前の由来どおり、私の居場所は心（ここ）なんだ。いつも、いつも二人の励ましが力をくれる。心から幸せをかみしめています。産んでくれてありがとう。いつの日か感謝を少しでも恩返しにかえられるその時まで、もう少し待っていてください。すみません。まだまだ、心配をかけると思います。これからもよろしく願います。お身体を大切に。

からっぽの弁当箱

試合の日、母はいつも手作りの弁当を作って、僕にもたせてくれる。家族が多いこともあり、母が僕の試合を見られないときがある。そんなとき家に帰ると、母が試合の結果を聞いてくる。僕は母に結果を伝えたあとに、「弁当ありがとう。」と言って、からっぽになった弁当箱を手渡す。試合で負けることもある。監督やコーチに怒られることもある。そんなとき、僕の心に寄り添ってくれるのは、母の弁当だ。母は試合の度に、朝早く起きて弁当を作ってくれている。そんな母に、感謝を伝えるためにも、これからも僕は、家に帰ってきたら、からっぽになった弁当箱を、母に手渡したい。

頑張れの一言

ただ一言だけでいいから頑張れと言ってほしい。今のままでは志望校に行けないことも、しっかりと勉強しなくてはいけないことも全部自分が一番分かっているから。「今のままじゃダメだよ。もっとしっかりと勉強しないと。」そんな言葉はもう何回も聞いた。自分なりに頑張っているつもりでも、実はまだまだ努力が足りないことも、周りと比べて一人だけ取り残された気持ちになることも、正直言わずごく辛い。だけど、まだ誰にも弱音は吐きたくないし、自分の限界だって決めたくない。わがままで迷惑ばかりかけているけれど、ただ一言だけでいいから、「頑張れ。」と言ってほしい。

我が家の掟^{おきて}

我が家には、中学生ならではの反抗期に対し、一つ掟がある。それは、「反抗したら反抗する」というものだ。

簡単に言うと、親に対して「いやだ。」と反抗すると、親も「いやだ。」と反抗し、ご飯をつくってくれなくなり、洗濯もしなくなる。これが我が家の掟だ。確かに、親に反抗されると、いずれ崩れていくと思う。だからこそ、ぼくは親に反抗はしない。反抗しても、半人前のぼくは一人ですべて自分のことをできなない。だからこそ、一人前になってから、いや、むしろ親に一生反抗しない。

この掟は、ぼくが一人前になるための、とてもいい掟だと思う。



届かないありがとう

私には、ありがとうを伝えたい大切な人がいる。

でも、ありがとうは届かない。私が伝えたい相手、それは父だ。私には、生まれたときから父の記憶がない。遊んだことも、抱っこしてもらったこともないと思う。

幼稚園のころ、お父さんリレーでは、園長先生が父の代わりに走ってくれた。どうしても私には父がいないのだろうと、何度も考えたけれど、それを母には一度も聞いたことはない。聞けば、母との関係が崩れてしまうような気がして、どうしても口に出せない。でもいい。私の父がどこにしよう、私が生きていく限り、父は父であり続けるのだから。

父へ どんな理由があっても、父でいてくれてありがとうと思ってるよ。いつか逢えたとき、胸を張って歩けるように、頑張って生きます。

母からのプレゼント

私の母は、ホルンの先生です。そして私も、ホルンをしています。

けれども私は、絵を描くのもすごく好きなので、将来は絵でいきたいなあと思っていました。しかし、母はそれに反対しました。「それでやっていけるわけないでしょ。」と言われて、ショックでした。ずっとホルンも好きだけれど、絵が大好きだったからです。その反対の言葉の意味がわからなくて、少しいらだちも募り、「何も知らないくせに。」と書いていました。けれども、その次の日、私の机の上に、イラストを描くための色ペン等が置いてありました。びっくりして、母に聞いたら「いつも絵を描いていて、好きっていうのは伝わっているよ。決してダメって意味じゃないのよ。」と言ってくれました。私は、その言葉に応えるために、今日も大好きな絵を描いています。

「ありがとう。」の一言

「ありがとう。」の一言が、出ない。
「ごめんなさい。」の一言が、出ない。
それなのに、「嫌だ。」の一言は、嫌になるほどに出る。

いつも思いと反対のことを言うこの口が、いつか正直者になる日を待つ。
それまでは、察してください。お父さん、お母さん。



夕食と団らん

「今日も十時まで塾？」「うん。」こんな会話が五月から当たり前のように飛び交うようになった。六時から七時三十分まで授業、その後コンビニで夕食を買って塾で食べる。そして十時まで自習。このような習慣が身に付き、ほとんど夕食を家で食べるのがなくなった。ある日、いつものように塾の話をしていたとき、母は小さな声でつぶやいた。「夜、家族みんなでご飯が食べられないね……。」この言葉は、どんなに小さな声でも僕の耳の中にしっかりと入ってきた。ふと家族と食卓を囲みながら楽しく団らんをしている風景が頭に浮かんだ。家族との団らんはとても大切なものなんだなとこのとき、改めて感じた。忙しくても一生懸命ご飯を作る母のこの言葉を聞いて、心が揺れ動いた。

強くなりたい

父みたいに強い人間になりたい。
父は大きい樹木の根っこみたいだ。
私たち家族をずっと支えてくれている。
でも、一人じゃ大変だよ。
だから、一緒に支えるよ。



モーニングコール

ぼくの父は、朝がきらい。けれども、今年の春から単身赴任になってしまった。

ぼくは、毎日父を起こすため電話をしている。もうそろそろ自分で起きられそうだが、父は、

「やめよう。」

とは言わない。毎日の電話は、もう「当たり前」のことになってきた。ちよつとめんどうに思うこともあるが、起こすときに交わす一言、二言が結構楽しい。

これが親子のコミュニケーションというやつかもしれない。



素直になれなくて

父の部屋を初めて訪れる。父が単身赴任を始めたのは、私が小学生二年生からで、もう七年が過ぎようとしている。初めの頃は寂しくて、会いたくて、月に一回の帰りを心待ちにしていた。中学になった現在は、特別な感情もない無表情な出迎えに、父も慣れてしまったことだろう。

部屋に着いた。殺風景な部屋を想像していた私の目に飛び込んできたものは、壁一面に貼られた、私が小さい頃から父にプレゼントしてきた絵や手紙や写真。広告の裏に書いた小さな絵までもが大事に飾ってあった。父の心が伝わってきた。でも、素直な気持ちを出せないまま部屋を後にしてしまった。

今から父に三年ぶりに手紙を書く。父の大事な宝物に、また一つ加えてもらうために。

「^{おも}想いを重ねる」言の葉

— 親から子へ —



もっと笑ってよ

私の前でしか自分を出さないあなた。

グチを言えるのも、文句を言えるのも、全部お母さんの前ですね。

どうして、他の人の前で自分を出さないのですか？

小さい頃の育て方に問題があったのだとしたら、ごめんなさい。

もう中学二年生です。

そろそろゲラゲラ笑うあなたを、外でも出してみてはどうですか？

怖がらずに、これが私よ！と自信をもって笑ってみてはどうでしょうか、

案外、楽になるよ。



家族と仕事

「この家に生まれてきて幸せか？」

子は親を選ぶことはできない。親も子を選ぶことはできない。

親になりたくても、子を授けられない家庭もある。子を授かって初めてわかった親の気持ち……。「生まれてきてくれて、ありがとう。」

「健康に成長してくれて、ありがとう。」

毎日夕飯を家族みんなで食べられることが、父ちゃんの小さな幸せ。

多分、家族で夕飯を食べている家庭はほとんどないと思う。

この当たり前のようなことをできないのが現実。何気ない小さな幸せを手に入れるために、失ったものがあるのも事実。

会社勤めを辞めて、自分で仕事を見つけて収入にする。

そう、仕事は選べるけれど、家庭は選べない。だから、父ちゃんは多少生活が苦しくても、家族みんなでいられる時間を大切にしたい。

その失いたくない時間は、お金で買えるものではないのだから……。

引っ越し

「僕の故郷ってどこ？」

そう聞かれて口ごもってしまったってごめんね。

引っ越しの多い我が家。

仲良くなったお友達と離れ離れになってしまっ

て、悲しい思いもさせたね。

夜こっそり自分の部屋でアルバムを開いている

ことも、お友達から届いた手紙を読んで、涙を流

していたことも知っているよ。

「たくさんの人に出会えて、いろいろな所にも

住めて、僕は他の人より得をしているよね。」

そう言ったあなた。

強く、たくましく育ってくれて、ありがとう。

お母さんは見守ってあげることしか出来ないけ

れど、いつも全力で応援しているよ。

あなたが私に教えてくれたもの

小さなあなたが一人で歩き始めたときに、

転ばないように、怪我しないように、

あなたが痛い思いをしなくてすむように、

見守って、手を引いて、声を掛けて、

大切に大切に育ててきた。

と、思っていた。

でも、それは母の自己満足でした。

転んで、怪我をして痛みを知り、

あなたは成長するのだと私に教えてくれました。

先回りして教えるのではなく、

痛くても、怖くても、それにぶつかっていくあ

なたに、寄り添っていいこうと思います。



「まあいいか。」

私が忙しくても、頭が痛くても、必ずその時間になると、私の携帯が鳴る。

「〇分の船。」たったこれだけ。

(もうこんな時間か。)と思う日もあれば

(今忙しいのに。)と思う日もある。

ほぼ毎日、イライラしながら車で向かう。

ノロノロ歩きながら、向かってくる姿に

(急いでよ!)とまたイライラして、

(一言ビシツと言ってやる。)といつも思うが、

車に乗ってきたあなたの姿を見ると、

(今日も一日がんばってきたんだなあ。)と、

うれしくなって、今までのイライラが、

(まあいいか。)となってしまうから不思議

である。

そして私は、

この(まあいいか。)の不思議な時間が、

とっておお気に入りである。

お母さんがうるさい理由

朝ですよ、起きなさい。

さっさと朝ごはん食べて！学校遅れるよ！

遊んでばかりだけど、宿題終わったの？

うるさい、とあなたは言う。

でもね、それはあなたのことが心配だから。

将来幸せになってほしいから。

だから、あえて言います。

お母さんは、うるさくてナンボの商売です。



母の日課

「今日はどんな一日だった？」

「普通だったよ。」

何でもいいのだ。今日のあなたを知りたいのだ。

「あれはどうだった？これはどうだったの？」

根掘り葉掘り、ようやく聞き出し成功。

そして、

「それで？それで？」のマシガン口撃。

ああ、また今日も食い付きすぎたかな。

「もう、ママに話すと長くなるし！」

娘は面倒臭そうに話をやめると、

おやつを頬張り始めた。

よしよし。いつも通り元気そうだ。

今日も一日、お疲れさま。

成長

「ああしなさい。」「こうしなさい。」と

言っていた日から、

「ママ、ああしたら。」「こうしたら。」と

言われるようになった。

いつのまにか大きくなって

どんどん一人でやっていく。

まだまだ甘えてほしいけれど、

追いこしてゆけ、我が娘



普通の暮らし、最高！

先月、私は急に心臓を患いました。君が寝ている間に救急搬送され、緊急の処置、集中治療室での日々、死を近くに感じるなか、神様に何度も何度もお願いしました。

「君にもう一度、会いたい。」

「君をもう一度、抱きしめたい。」

「君ともう一度、普通に暮らしたい。」

容態が安定し、君が初めてお見舞いに来てくれたとき、「一生分の親孝行はもう貰っているから。」なんて強がりも言ったけれども、本当はもっともっと、ずっとずっとパパは君を眺めていたのです。

一か月が経過した今、あのときのお願いは全て叶いました。なんて幸せな毎日！パパの娘でいてくれてありがとう。楽しみにしていた夏の計画は、全部キャンセルになったけれども、君との普通の暮らしが最高に幸せです。

見過ごしている日々の景色

玄関から、

「ねえ、見て見て、きれいな夕焼け。」

と、うれしそうに私を呼ぶ声がする。向かった先には、グラデーションに染まった夕焼け空と、夕焼けが反射して少し赤くなった頬をにっこりさせている娘がいた。

ああ、私はなんて幸せ者なんだろうと、心が震えた。

忙しくしている日々の中で、四季を感じたり、空を眺めたり、そうしたことが尊いものであることをいつでも教えてくれるのは、娘の存在だ。そして、美しいものを共有しようといつでも真っ先に声をかけてくれるその優しさに、まっすぐ育ってくれた感謝の念を覚えるのだった。

忘れられない四月一日

二年前の四月一日の朝六時、突然お父さんが家で心肺停止になりました。

私は救急車に電話をしながら、心肺蘇生をその当時中一、中三だった息子としました。

五、六年前に小学校で習った心肺蘇生、それだけが私の頼りの綱でした。

中三の息子は私と交代で心肺蘇生、次男は外で救急車を待つ係。本当は八分で来るはずの救急車は出払っていて隣町からだったので、約二十五分心肺蘇生を続けました。

小さかった息子が冷静に私のまねをして蘇生する姿には、本当に驚きと感謝でした。

その甲斐あってお父さんは奇跡的に障害もなく、病院では心肺蘇生のおかげで助かったと言われました。

あの日は一生忘れられない日です。

その日から我が家で命の大切さと、命さえあればなんでもできるねと話しています。

願 い

娘―「ヤバイ。」

母―「やばくない。」

娘―「ウザイ。」

母―「うざくない。」

今の気持ちを当てはめる、便利なコトバの雨が降る。

それでも母は飽きもせず、今日も細かくアドバイス。

言葉は人をつくるから。

瑞々しくて愛らしい、イチゴのような口元は、優しい言葉と美しい歌声で溢れていてほしいのです。

お母さんだから

「お母さん、なんで知っているの？」

「あなたのことは、なんでもわかるの。」

「お母さん、どこで見たの？」

「お母さんは、見てなくてもわかるの。」



平成30年度「こころの言の葉」コンクール入賞者一覧

応募総数 16,011点 (中学生 14,103点 親 1,908点)

賞	中学生の部	親の部
大賞	山崎 ころ	鎌下 直子
準大賞	京田 遥香	長濱 理愛
準大賞	日高 菜愛	山元 栄作
優秀賞	上村 佑	山口 聡
優秀賞	森田 陽菜	南 八重
優秀賞	刈川 怜	松元 マユミ
優秀賞	出石 詩哉	池 あかり
優秀賞	甲斐 美日菜	上野 大輔
優秀賞	始良 怜花	福盛 美和
優秀賞	飯森 百々果	中馬 なつみ
入選	峯元 伶	長野 久美子
入選	東 莉々子	辻松 祐子
入選	茶園 ひなた	西屋敷 純子
入選	板垣 龍青	鹿島 俊昭
入選	内立輪 菜那	松隈 基子
入選	下橋 心	四郎園 奈那子
入選	桃北 凌冴	迫山 恵子
入選	備瀬 生貴	松窪 真由美
入選	南 颯真	小倉 章子
入選	前田 茉穂	田中 雅子
入選	有村 充輝	濱田 倫史
入選	佐土原 愛	日高 由美子
入選		匿名 希望
団体特別賞 吉野中学校		

平成30年度「こころの言の葉」コンクール 表彰式

～平成30年10月20日（土） 市民文化ホール 第2ホール～



教育長から受賞者の皆さんへ

鹿児島玉龍高校放送部の
生徒による作品朗読



審査委員講評

受賞者インタビュー



審査委員講評

審査委員長 上谷 順三郎 先生

今回の作品を読んで一番強く感じたことは、「親子の素直な気持ち」を交流する場としての本コンクール の意義でした。

中学生になると、家庭にいる時間が短くなった、友だちと過ごす時間が多くなったりして、子供の生活が変わってきます。親の方も、仕事が多くなったり、年齢を重ねて体調も変わってきました。親と子、それぞれ変わらないと思っ

たまま、親と子、それぞれ変わらないと思っただけでなく、コミュニケーションの方は思うように取れなくなっているのだと思います。そんな時期に、親と子がそれぞれの素直な気持ちを表す場所があるということは、とても重要なことだと思います。「お母さんとのじゃんけん」で感じている子供の気持ち、「父と私の約束事」に流れる子供の決心、「私の宝物」にあふれる子供としての変わらぬ思い。また親の方も、「中学生のあなたへ」変わらぬ思いを表したり、「母の毎日」は「うんまつ」の一言でがんばれていることを告白したり、父親の無力感が吐露された

り、と何気ない毎日の一コマに親子の気持ちの交流があることがよくわかります。今回は「平成」最後の「こころの言の葉」コンクールでした。平成の半分の歴史をもち、これからまた、さらに、新しい時代に引き継がれていくこのコンクールですが、親子が構えずに素直な気持ちを表す場として役立っていることを喜ばしく思います。

鹿児島大学教育学部長

大浦 慶子 先生

今年もたくさん作品に出会いました。

どの作品も親子のそれぞれの思いや葛藤が、言の葉となって表現されていました。読み返す度に、親子のそれぞれの思いに、胸が熱くなりました。特に今年は、父親の作品や、日頃は話せない、会えない多忙な父親に対する思いを言の葉にする作品が増えていたように思います。子供たちは、親の姿をしっかりと見ています。親の後ろ姿に学んでいます。

忙しい毎日の中で、会話を求めようとする親子や煩わしさを感じる子も、反発しながらも親の愛を感じている姿がありました。お互いの見えない、日頃、言葉にして返せない思いを言葉にして伝えることの大切さを感じます。また、特別なことではなく、家庭で交わす短いあいさつでも、お互いを理解し合えることができるかと教えてくれます。日常の何気ない一コマに幸せを感じる親子の姿があります。思春期の真っ只中で、自分をうまく表現できない子供たちの素直な気持ちが伝わってきます。

思春期の子供たちの素直な心や親の葛藤が詰まった「こころの言の葉」を、多くの方々に読んでいただき、これからは生きる子供たちや子供たちを支える保護者に、温かい言葉掛けをお願いしたい。これからも「こころの言の葉」が広く読まれることを期待したいと思います。

長島町 教育長

(元市教育委員会スクールカウンセラー)

遠藤 陽子 先生

審査を終えて昨年と大きく違ったことは、日常の暮らしの中にある当たり前の幸せを題材にしたものが多かったことです。

私も含め多数の人は、非日常の中から幸せを見つけようとしています。それはとても刺激的で、満足感を得やすいものですが、当たり前の中の幸せは「見ようとしなければ、見えなくなるもの」です。そんな見えなくなりがちな幸せに溢れているのが家族なのだ改めて感じさせられました。

中でも父子のやり取りが多く、日頃言葉少ない父親の子育てに対する反省や後悔、覚悟の他、口に出さずとも心の底から我が子を愛している想いと、それを知った子供の気持ちなど、様々な父子の本音が詰まっていました。この「こころの言の葉」は、会話を通して子供とのやり取りがあまり頻繁ではない家庭にとっても、親子の本心を繋ぐ大切な役割となったのではないのでしょうか。

父子のやり取りを含め、親子間のやり取りの中で多数登場する「ありがとう」の言葉の裏には、数えきれないほどの当たり前の幸せが積み重なっていることを感じずにはいられません。逆に、互いに反発する気持ちの作品もあり、それもまた親子の在り方なのだと思います。

「こころの言の葉」は十人十色の家族の形を垣間見ることが出来ます。あなたも本書を通じて自分色の家族について考えるキッカケになさってみてはいかがでしょうか。

フリーアナウンサー

隈元 浩二郎 先生

親子関係に優劣があるわけでもなく、ただ照れくささや日々の関わりの方しなさなどが原因しているのでしょうか。これまで父親の応募は伸び悩んでいました。ところが、今回は例年とは一変し、父親のメッセージが増えました。しかも、父親としての素直な思いや姿が描かれた秀作が目立ちました。同じ父親として、とてもうれしく感じました。心に響くメッセージとは、案外、たわいもない日常のやりとりの中から生まれるもののようにです。今回の入賞作品のどれを見ても、決して構えることなく、力みの感じられない普段着のやりとりを切り取ったものばかりでした。

そもそも言葉は、音声として口から発せられるものだけではありません。私たちの生活の中では、ちよつとした仕草やたわいもない頷き、訴えかけるような瞳など、言語にはならない「態度」という言葉が交わされています。今回はストレートな感謝の思いを託した言葉に加え、素敵な態度のメッセージが、随所に展開されていました。

いつの世も、母親であれ、父親であれ、娘であれ、息子であれ、互いを気遣う思いは果てしなく美しく、魅力的なものです。日頃の温かい会話はもちろん、言葉にはならない態度というメッセージを、「言の葉」という形に託して届けることも素晴らしいことだと、再確認した次第です。ぜひ一年に一度くらい、相手を慮る^{おもんばか}気持ちや、日頃態度でしか表現できていなかった思いを、「言の葉」という文字に託してプレゼントするのも素敵なことですね。

元中学校校長

南 香織 先生

はじめに、第十六回「こころの言の葉」コンクール審査にあたり、御応募いただいた全ての方に感謝を申し上げます。一点一点、読ませていただきました。どの作品も素晴らしいもので、作品の背景が脳裏に浮かんで心が温かくなったり、胸がギュッと締め付けられたりするような感覚の中、新鮮な気持ちで読ませていただきました。

一般的に、思春期といわれる子供たち。普段は、なかなか言葉に出せない親への感謝の気持ちが、言の葉の中には溢れていました。また、考えている以上に、子供たちは、親のことを考えていたことに、頼もしく嬉しい気持ちになりました。

親もまた、忙しい日常の中で子供と向き合う時間が少ないと感じる中、普段は伝えられない思いを伝えたいという無償の愛に溢れておりました。わが子への愛情には限りがありません。たくさん経験を通して生きる力を身に付けてほしい。親は、わが子の幸せな未来を誰よりも願っています。

「こころの言の葉」作品集をたくさんの方に読んでいただき、今一度、大切な子供と親のために、親子関係について振り返り考える良い機会となることを心より願っております。

市PTA連合会会長

編集後記

関係の皆様御尽力により、「こころの言の葉」コンクール作品集第十六集が完成しました。一万六千点を超える応募数は、各中学校での取組の成果と感謝申し上げます。

本コンクールは、メールでの応募も受け付けているのですが、メールでは父親からの応募が増える傾向にあります。これらのメールには、応募作品以外にも、一言二言、メッセージが添えられていることが少なくありません。ある父親は、娘に対して身の引き締まるような言の葉を寄せた後、担当者である私に次のようなメッセージを残してくださいました。

普段、厳しい言葉ばかりを言っています。こころの言の葉をおして、娘に私の気持ちが少しでも伝わればと願います。

この父親のメッセージから、担当者は、歌人である俵万智さんの短歌を思い出しました。

やさしさをうまく表現できぬこと

許されており父の世代は

父親はもちろん、母親も、子供も、お互いへの思いを伝えることは、やはり難しいものです。うまく表現できない思いを、それでも言の葉に込めて応募してくださいました大勢の皆様は、心から感謝いたします。

本年度の団体特別賞は、吉野中学校が受賞しました。例年の積極的な応募に加えて、親子の入賞作品数を評価されての受賞です。それぞれの学校での取組が、このコンクールを支えてくださっています。

来年度も、ますます親子の心の交流が図られるよう取り組んでまいります。更に多くの素晴らしい言の葉が寄せられることを心からお待ちしています。

こころの言の葉

～第16集 一つの言の葉、一つの想い～

平成31年1月31日

発行 鹿児島市教育委員会

〒892-0816 鹿児島市山下町6-1

TEL (099)227-1941 FAX (099)227-3016

表紙写真 福元 徹 撮影

